



幻冬舎文庫

おついち

作者：乙一



暗いところで 待ち合わせ

1人きりで自分の中に閉じこもりながらも、心の奥底では理解者を、救いを求めてやまない。作者である乙一はそういうキャラクターを描くのが非常にうまく、他者との関係構築が不得手な主人公は作者自身なのではないかと思ってしまう。おそらく、アキヒロとミチルの関係は作者の理想のコミュニケーションなのだろう。「切なさ」の名手といわれる彼の書く作品はいつも何らかの欠落感を抱えていて、それでいて読後は何となく暖かい心持ちにさせられる。

この作品のテーマはタイトルに集約されている。『暗いところで待ち合わせ』をしたら、あなたはどうするだろうか。ずかずかと歩み寄ることはできない。おそらく、手探りでこわごわと、相手との距離を測りながら進むだろう。それでも決して『待ち合わせ』を諦めない主人公達の物語を、ぜひ味わってほしい。(b)

これは作者の言葉を借りるなら、「警察に追われている男が目が見えない女性の家にだまって勝手に隠れ潜んでしまう」話である。

目が見えなくなってしまったミチルは、父の死後1人で一軒家に住んでいる。外出はあまりしないし、1人で外に出るのは彼女にとって恐ろしいことだ。時折訪ねてきて外に連れ出してくれる友人だけが外界との繋がりである。

そんな彼女の家に、警察に追われる男アキヒロは隠れ潜む。目が見えないとはいえ、ミチルは徐々にアキヒロの存在に気づいていく。TVのニュースから、アキヒロが殺人犯として追われている男なのではないかと考えるが、同じ家にいる男の醸し出す空気は決して恐ろしいもの

ではなかった。

彼らはやがてその距離を縮めていく。しかし、それは普通の小説の中の男女のようにうまくはいかないし、ストレートなものでもない。彼らはもどかしいくらいにゆっくりと、お互いの存在を認め合う。つかつかと近づいて抱き合うのではなくて、自分たちのテリトリーをそっと重ね合わせていくように、彼らは曖昧に親密になっていく。

ある夜、ミチルは何も言わずに食卓に2人分のシチューを並べ、アキヒロはだまってミチルの向かいの席に座る。ミチルはそうして、アキヒロにその家にいることを許した。

アキヒロもミチルも、人との関わりがあまり上手でない。臆病で繊細な人間だ。



魔女

小学館 月刊IKKI隔月連載中

「言葉で考えるあなたは言葉を越えることは考えられない。あなたはあなたの世界を上げることはできてもあなたの外に出ることはできない」

(魔女第1巻収録『spindle』より)



赤子は言葉を持たない。彼らがどう思考をしているか、思いを馳せたことのある人も多いはず。彼らは思考の最小単位・『言語』を持たないのだ。だが彼らは思考できないのではない、言語以前で世界を知覚しているのだ。彼らは言語化できない世界を知っている。大人になり言語を学ぶと誰もがそれを忘れ去ってしまう。この短編集が描くのは、そんな『言語化できない世界』。

この作品は『内容』だけでなく『表現』にも注目して読んでいただきたい。言語を越えたものを、文字媒体の異端である漫画というメディアがどう表現するか。漫画ならではの表現能力をとくと堪能あれ。

Author profile 五十嵐大介
埼玉県生まれ。1993年、『お囃子が聞こえる日』で講談社の四季大賞を受賞。2004年、本作『魔女』で文化庁メディア芸術祭マンガ部門優秀賞受賞。その他の代表作に『リトルフォレスト』・『そらとびタマシイ』など。現在は本作を月刊IKKIで隔月連載中。

空 虚な自分に嫌気が差し旅に出た主人公。彼女は船で魔女と出会う

不思議な時間を過ごす。魔女の薦めに従い訪れた孤島は、自然の楽園。そこで過ごした彼女は、初めて自分と世界との一体感を獲得する。そこでは言語によって分かれていた事象の境界がなくなり、一つの“うた”となっていたのだ。彼女は

世界に祝福されているのを感じ、生きる力を取り戻す。だが、大きな存在に接触することは同時に罰を受けるリスクを負うことであつた。約束を破るものに魔女は祝福を与えない。彼女は島からの帰り際に「島の物は持ち出してはいけない」という言いかけを破ってしまう。そのため、手に入れたはずの祝福と、自分の名前を取り上げられ、そして――。

その他、不思議な短編が淡々と綴られる。話から何かのテーゼを読み取ろうとせず、ただ“感じる”ことをお薦めする。

はみだし
すてーじ

今年も二重登録できる♪

⇒男なら三重、四重登録でしょう。それよりもまず、『今年も』って、あなたは1回生では？

(教・1 三田くん)